

TURNING POINT

ターニング・ポイント

来し方を思えば、流れに漂う葉っぱのごときわが人生。何が起きようとも、決して流れに逆らうことなく1つひとつ乗り越えてきた、そのように感じています。

神栄株式会社 相談役 新 尚一氏

【略歴】あたらし・しやういち
1941年生まれ。関西学院大学商学部卒業。1964年に神栄(株)入社。2000年に社長、2008年に会長、2012年より現職。2004年から神戸商工会議所副会頭を務める。神戸貿易協会会長

阪神間で育ち、中学から関西学院へ。そこで出会った1人の教師の教えが、今なお深く胸に刻まれている。

中学に進んだのは、戦後復興は進みつつも、日本という国がまだ貧しかった頃。当時、母校・関

西学院の中学部長をしておられた故・矢内正一先生は、生涯を教育に捧げられた名物教師でした。いつも子どもたち一人ひとりの頭をなでながら話しかけてくださり、生徒からとても慕われていました。

多感な少年時代に先生から受けた精

神的影響は、計り知れないものがありました。敬虔なクリスチャンだった師の「一隅を守れ、あえて難に赴け」という言葉が、今も心に残っています。「人はみな、この世に生かされている存在。生かされている以上は、自分の能力を発揮して世の中に尽くせ。この

世に生まれてきたからには、全身全霊で世に尽くさねばならない」

その教えのすべてを、当時理解できたわけではありません。けれども、後々の人生において、授かった数々の言葉が折に触れて自分を支え、導いてくれたように思います。

大学卒業後、外国への強い憧れから商社マンに。入社翌年に中国に渡り、無我夢中で働いた。

1964年に神戸の老舗商社、神栄(株)に入社。翌1965年9月、会社から4カ月間の中国出張を言い渡されました。まだ中国と国交のない時代。駆け出しの商社マンである自分が、未知の共産主義国で仕事をするようになるなど、まったく想像もしていませんでした。

スポーツで鍛えた体力には自信がありました。中国語はまったくできませんでしたが、食事の注文にも四苦八苦。そんな中で取引先のアテンドをしなければならず、毎日必死でした。

しかし、何にでも関心を持つ性格ゆえ、異国での生活は面白くもありました。何より世界を知り、外から日本という国を見る機会に恵まれたことは、自分にとって大きな財産となりました。

4カ月の任務を終える頃には中国語にも慣れ、日常会話には困らなくなっていました。その後、両国を行き来しているうちに、文化大革命が起きて中国は大混乱。日ごとに対中貿易が難しくなる中、文革真っ只中の駐在も経験しました。国交がないため日本からの情報は在留邦人の元にはほとんど届かず、いざというときに守ってくれる存在もありませんでした。ただ不安におびえる毎日。しかし、覚悟を決めて激動の中に身を置くしかありませんでした。

外国での商売は、まず相手を理解することから始めなければいけません。商社マンは「民間の外交官」ですから、礼節を持って現地の人に接するべきです。そうしたことを、中国という国の大きな転換期に立ち会いながら学ばせてもらいました。

44歳のとき、再び大きな転機が。20代の頃から従事していた農水産物輸入の仕事から離れ、新しくできる電子機器本部のトップを任されることになったのです。当時の日記を読み返すと、「死にもの狂いでやれ」「2カ月間で電子機器についてマスターし、将来を託せる部門にせよ」という社長(当時)の叱咤激励と、自分の戸惑う気持ちが書き残されています。

まずは勉強、そして営業拡大を目指しました。部下たちがよく支えてくれたおかげで、何とか経営基盤を確立。4年後、京都・綾部にあった研究所を神戸市西区に移したのと同時に、今度は水産部長に就くことになりました。晴れの開所式で、部下たちと泣きながら別れを惜しんだことが懐かしく思い出されます。

偉人の言葉に、変化対応の大切さを思う。

歴史上の偉大な人物、優れた経営者の言葉からも示唆を得てきました。「一寸先は闇とはよく言ったもので、家内に慶事があれば、門口には早くも疫病神が立っている。自分の仕事に満足している暇はない」とは、徳川吉宗の言葉。面白いことに、同じことを米国の実業家ジャック・ウェルチ氏が言っています。「どんな変化が起きるかを正確に予測するのは困難。なすべきことはすべての変化を乗り越えることだ」。まさに両者の言葉通り。先のことをあれこれ考えても仕方ない、



入社翌年、長期出張先の中国で。強烈なカルチャーショックを受け、日々戸惑いながらも、商社マンとして経験を積んだ

今起きていることを乗り越えていくしかないのです。

「執念を持って物事に取り組み。しかし執着はするな」。長年、社員たちには、そう言ってきました。当社も前半はシルク一本。しかし、それだけでは難しいと判断し、製糸を止める決断をしました。何事にもまずは執念を持って取り組み、その結果、もし難しいと分かれば、いさぎよく決断しなければなりません。そうすることによって、中身(事業)は替わっても、会社という器は保たれていくのだと思います。

神栄(株)

1887年設立。生糸問屋として神戸における生糸市場形成に貢献し、1920年代から1930年代にかけて生糸取扱量で国内トップに。現在、繊維・食品・物資・電子の4分野で事業を展開する。2012年3月期連結売上高464億円、従業員数662人。